

▲▲▲ 山に育てられた日々 (山行リーダーの勧め) ▲▲▲

福寿 新一

湘南海岸の葉山に長者が崎という所がある。岩山の岬が海に突き出しているちょっとした景勝地で遠足の小学生には素晴らしい景色に見えた。他にも、船が行き交う東京湾の観音崎、海と江ノ島と富士山のコラボレーション、等々美しく思うも歩いたり登ったりする対象ではなかった。戦後数年、横浜の街なかはいまだ焼野原も残る時代であったが自分にはすでに遠い過去であり、緑の田んぼを吹き渡る風、茜色夕景、遠くに見える国道を行き来する車のライト、夜空の星、里山の自然に溶け込んで心地よい時が流れていた。

やがて社会人となり小さな会社に勤め山好きの仲間と山岳会をつくり貧乏生活を脱しきれぬままキャラバンシューズと小さなザックを買って、奥多摩や奥秩父の山歩きが始まった。厳しくも優しい先輩たちに煽られながら、ただただ夢中で歩いたものだ。

そのうちに同輩同士でも歩けるようになり、丹沢、南アルプスと等近めの山歩きも出来るようになった。男子だけの山岳会で女子社員から何故連れて行かぬのかと苦情も出たがそのころはなぜか突っ張っていた。そんな時代だった。

ある日、ひとから借りた本「八甲田山死の彷徨」でリーダーとは何かについて考えさせられた。統率こそ第一義の軍隊で何故あのようなことになったのだろう。それをきっかけに山岳小説も読むようになったのだが岩登りも雪山もやらず内容が理解できるはずもなかった。

会社を辞めて造園業を始め子育てに追われ、いつしか山から遠くはなれてしまったのだった。庭造りは楽しかった。石を配置するには脳裏にある岬や山や谷川、溶岩の流れなどを思い起こさせた。木と石の組み合わせ、竹垣づくりなど自分の発案で仕事をするのは素晴らしかったがさっぱり儲からずバブル景気などは高い空の上を流れる雲のように通り過ぎて行ってしまった。地下足袋で道を歩いていると女性に追い越され、なにくそと早足にするも追いつかず、これは何とかせねばと一人で奥多摩を歩き始めたのもそのころだ。

そんな時に都岳連の雪山講習会と出会った。山岳小説の内容が少しは理解出来るようになればと軽い気持ちで申し込んだ。11月から4か月間、耐寒訓練、富士山5合目の雪上訓練とユニークな都岳連のコーチたちに囲まれて、ワイワイと楽しい訓練の日々であった。最後の硫黄岳登山の日にこのまま別れてしまうのもと山岳会を立ち上げ、その末席におさまった。年に3回くらい行ければと思いが、月に2回行くのだという。すごい熱気であった。会発足後も何人かのコーチがオブザーバーとして面倒を見てくれることになり、雪山の他に岩登りや沢登りの指導をしてくれ、それが本格的の山にのめりこむキッカケとなった。平素仕事で脚立や木登り、石材の上を飛び歩くようなことをやっていた体の動きが先輩の目に留まったのだろう岩や沢に連れて行かれて、2年を過ぎた時には囚らずも代表にされていた。

その年はマチガ沢で他の山岳会のベテラン会員をコーチに招き雪上訓練をすることになり電車で土合いの駅に向かっていた。付き合いなれた先輩コーチは岳連の今年度雪山講習で富士山に行くとの事でドタキャンされ、初見のコーチに呼ばれ挨拶の後言われたのだった。「今回は自分がコーチをします。ここは雪崩等多い場所ですから、もし事故等あった場合は捜索救助等できる限りのことはします。しかし、責任者はあなたですからね。」ハッキリと宣言されて新米リーダーはうろたえた。もう一組他の山岳会と合同で行動する予定でもあったので、その旨伝えると「聞いていません」と言われるし……。 “責任者か……”。まずは恙なく訓練を終了せねば、注意は怠れないと緊張する。もし事故が発生したら事後処理を全うせねばならぬ。出来るのか……。富士山で楽しくやっという先輩が恨めしかつ


たが、ここはシッカリと腹を括らねばならなかった。交代で見張りを立て訓練は無事終了したが終始気の抜けない山行になった。

オブザーバーで参加してくれている先輩達にもそうそうは頼めず、謂わば全員が素人の山岳会は試行錯誤で山行を計画し実行せねばならなかった。安全を担保するため岳連の技術講習会、気象講習会等々に参加し、地形図、エアリアマップ、GPS、高度計、ガイドブック、一木一草すべてが武器の構えで挑んだ。夏山、秋山はうまくできたが、岩、沢、雪山はそう簡単ではなかった。地形図は山行前に入念にチェックし、沢なら微細な枝沢、ゴルジュ、滝、分岐、高度等、山なら岩場や危険箇所、分岐点、重要箇所の緯度経度等情報をできるだけ多く収集し、天気は行程の途中でも大方記入した(現在は携帯頼みですが・・・)。

道迷いにはGPSが、山行難度は岩登りのグレードが大いに役だつ。自分の力量を把握しておけばその難度の岩・沢は登れると思われる。ただしガイドブックでは著者と読者の力量差によって簡単に越してと書いてあるが初心者には難しい所もあり慎重にチェックを要する。こわごわと腫れ物に触るような慎重さで山に接してきた。リーダーとして様々な苦勞をして達成した山行は満足感も人一倍大きく、失敗山行も又いい思い出として何時までも心に残った。

幼少の頃になんとか美しく胸の奥に刻んだ自然が原点となって山好きとなり、その後の長い人生において心の支えになってくれようとは思ひもしなかったが、山に助けられ、山に育てられたような気がする。

山岳会は山慣れたメンバーに負担が偏りがちだけれども、できれば多くのメンバーがリーダーを経験してみしてほしい。きっと何かだいじなものを掴めるだろう。自分も日本の美しい自然を気のおけない仲間と歩く楽しみをもう少し永く味わってみたいと思う。 (完)

特集記事目次画面に戻るには、画面最上段最左側の「戻るボタン」で戻って下さい